

1 対象機関の概要

所在地：879-5593 大分県大分郡挾間町医大ケ丘1-1

設立年：昭和51年

学部構成：医学部医学科・看護学科

学部学生数： (編入学)

区分	入学定員	収容定員	在籍学生数
医学科	85 10	560	574
看護学科	60 10	260	271
合計	145 20	820	845

大学院構成：医学系研究科博士，修士（看護学）

大学院学生数：

区分	入学定員	収容定員	在籍学生数
博士課程	30	120	135
修士課程	16	32	28
合計	46	152	163

教員数：

教授	助教授	講師	助手	合計
61	53	37	140	291

沿革：昭和51年10月 開学

昭和56年 4月 医学部附属病院設置

昭和59年 4月 医学研究科（博士課程）設置

平成6年 4月 医学部看護学科設置

平成10年 4月 大学院（修士課程）設置

・ 本学では、平成10年の大学審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について - 競争的環境の中で個性が輝く大学 -」を受けて、平成12年度にカリキュラムを全面的に改革した。この改革は、社会のニーズに十分応えることができる医師と看護婦を養成する上で効果的な改革であると考えている。

・ 教養教育改革では、人間コミュニケーション、人権尊重、人間の理解などに重点を置いた授業科目を開設して、専門科目とより有機的な連携を図り、看護学科ではくさび型の教育を導入して教育効果を高める工夫をした。

・ 専門教育改革では、医学科でチュートリアル教育、臓器別機能別統合カリキュラム、クリニカルクラークシップを採用、看護学科では理論と実践の有機的統合を図ったカリキュラムの導入等を行った。併せて、多様な実習のための教育病院・施設の拡充、臨床教授制度の拡充など教育環境の整備にも努めた。

・ 以上のほか、単位制の導入、OSCE（客観的臨床能力試験）の実施、介護等の体験実習の実施、大学院の昼夜開講制導入、他大学との単位互換等の教育改革を推進して、目的及び目標に沿った大学づくりを目指している。

2 教養教育に関する考え方

“教養”の原語である culture は、もともとラテン語の cultura（耕作）であり、土地を耕して作物を育てるという意味である。現在は、それが転じて「心の耕作」という意味に使われている。つまり、教養とは学問や芸術などを通して人間の心や精神を耕すこと、優れた人格を養い育てることと解されている。

大学における教養教育として、学生の「心の耕作」や「人格の陶冶」はどうあるべきか。本学は医学科と看護学科からなる単科医科大学であり、優れた医療者、医学・看護学研究者を養成することを主たる目的としている。したがって、人の命と健康を守る医療者、病人をケアする専門職を養成するための教養教育には何が重要か、何が欠かせないかということを念頭に置いて、その内容やカリキュラム構成を考えなければならない。

医学・看護学の専門教育の基礎として必要な教養を身につけるには、まず、人文科学、社会科学、自然科学をはじめ語学、芸術、スポーツなどの様々な分野を幅広く学ぶ必要がある。そして、学問について多角的に考えさせ、学生の知的好奇心や自己学習、問題解決の意欲を高めなければならない。受験勉強に慣らされた思考様式をほぐして、さまざまな問題について能動的かつ柔軟に思考し学習する姿勢を育てなければならない。また、将来の職業や生き方について考えさせ、調和のとれた人格、社会性や倫理観、コミュニケーション能力の備わった人間を育てること、すなわち、人間性に関する教育（いわゆる人間教育）に力を注ぐことが教養教育の必須な課題である。医師や看護職者を養成する大学において、「人間教育」は最も重要な課題であり、教養教育におけるその役割はきわめて大きい。

本学医学科の教養教育は、一般的な教養教育と専門教育のベースとなる教養教育（基礎教育）の2つの側面から構成されている。その意味を込めて名称は「教養・基礎教育」とし、1年次から2年次の前学期までをその期間に当てている。さらに、教養教育を専門教育とより有機的に連携させて、効果的な教育が可能となるようさまざまな工夫を行っている。例えば、修学段階の節目でイントロダクトリーコース、などの期間を用意し、教養教育から専門教育への移行がよりスムーズに進むよう特別の配慮をしている。また、看護学科では、教養教育として「基礎科目」を1年次から4年次まで配置されており（いわゆるくさび形）、専門教育科目を学習しながら一般教養及び教養科目を同時に学ぶことができるよう工夫されている。

3 教養教育の目的及び目標

本学は医師・医学研究者、看護職者・看護研究者を養成する医科学大学であるため、教養教育の目的及び目標は、医学科、看護学科の教育の目的及び目標を踏まえたものでなければならない。

医学科の教育の目的は、「患者の立場を理解し、全人的医療ができるよう、豊かな人間性、高度の学識、生涯学習能力、国際的視野を備えた医師を養成すること」である。この目的を達成するための目標として、幅広い教養と高い倫理観を備えた感性豊かな人材を育成する、問題発見・解決型の教育を行い、最新の医学知識や技術を習得するための生涯学習能力を備えた人材を育成する、コミュニケーション能力と指導力並びに協調性を備え、全人的医療やチーム医療の實踐ができる人材を育成する、医療や保健・福祉の問題を理解し、広い視野から地域社会のみならず国際的にも活躍、貢献できる人材を育成することをあげている。

看護学科の教育の目的は、「人々が心身ともに健康な生活を営めるよう、適切な看護を行うことができる専門的知識と技術の修得を促し、看護学の発展と地域住民の保健・医療・福祉の向上、ひいては国際社会への貢献ができるよう、豊かな人間性を備えた人材を育成すること」であり、その目標として、看護の専門職として求められる人間的成長を図り、生命の尊厳を理解し、人権を尊重して行動できる、看護の専門的知識と技術を修得し、個人やその家族、または集団の健康問題に適切に対応できる、看護学を基盤とした実践、教育及び研究の場において社会における看護の役割と責務を自覚し、行動することができる、看護専門職として、将来、国際的、学際的に活躍することができることをあげている。

このように、これからの医師や看護職者には多様な能力や技術、役割が求められている。そのため、幅広い知識や教養、基礎学力、専門的知識・技術はもとより、他者とのコミュニケーション能力や人間関係スキル、さらに、確固とした倫理観や責任感、人に対する思いやりなどの人間性に関する教育が重要である。したがって、本学の教養教育ではその基礎や基盤を養成することが主な目的である。それらを列記するならば、次のようなことが挙げられる。1) 幅広い教養や知識を身につけさせ、専門的知識や技術を修得するための基礎を養う、2) 物事を多角的にみる力、国際的視野を養う、3) 人間に対する全人的、総合的理解を促す、4) 他者とのコミュニケーション能力や協調性、リーダーシップを育てる、5) 人から信頼される人格、倫理観や責任感のある人格を育てる（人間性の教育）、さらに、

6) 主体的学習、生涯学習の姿勢を育てるなど。

以上のことを達成するには、幅広い教養と基礎的な学力を養い、自己及び人間、社会、自然、環境、生命、健康、病気、死などについて深く考えさせる機会を与えなければならない。そして、人間を生物-心理-社会-倫理-生態学的（bio-psycho-social-ethical-ecological）な存在として全人的、総合的にみつめることのできる力、他者とのコミュニケーション能力や人間関係スキル、倫理観や責任感などを向上させる必要がある。

以上の見地から、本学の教養教育の目的及び目標は次の通りである。

〔目的〕

医師や看護職者に必要な幅広い知識や教養、医学・看護学の専門知識・技術を修得するための基礎学力を身につけさせるとともに、人間を生物-心理-社会-倫理-生態学的な存在として全人的に理解できる、幅広い視野をもった学生を育成することを目的とする。また、それとともに、コミュニケーション能力や人間関係スキル、倫理観・責任感、医学生・看護学生としての自覚、ならびに自主的、能動的な学習態度を向上させる。

〔目標〕

- 人間コミュニケーション科学科目では、人間と社会、環境、言語等を理解する視点と方法論を学ぶ。
- 「人間とは何か」という根本問題について哲学的、倫理的に考察できる。
- 人間の行動やこころ、人間関係について心理学的な理解ができる。
- 人間と環境、人間と自然との関わりについて「生態学的」に理解できる。
- 社会と社会福祉の基本を理解できる。
- 生活と法との関係、社会経済の基本的なしくみを理解できる。
- 日本文学やアジアの歴史を理解できる。
- 日本語の文章構成法や表現法を修得する。
- 英語をはじめ、ドイツ語、中国語、スペイン語などの外国語を習得するとともに、その母体となる文化的背景（異文化）を理解できる。
- 物理学、化学、生物学、数学、情報科学、人間生物学等の自然科学科目では自然を理解する方法論を学ぶ。
- 物理学では自然界を構成する物質と生命現象を含めた自然現象には法則性があることを学ぶ。
- 化学では生命現象を理解するため化学的な物質観及び化学反応を学ぶ。
- 生物学では生命現象のエネルギー代謝、遺伝、調節を分子生物学的に理解する。
- 細胞及びそれからなる個体の機能を理解し、生物が

地球上でどのように進化適応してきたかを学ぶ。

- 数学では論理的思考法を学び、また、自然科学の量的記述法について学ぶ。

- 情報科学では情報収集と情報交換の方法を学ぶ。

- 根拠に基づいた医学を実施するために必要な統計学の基礎と具体的方法を学ぶ。

- 人間生物学では健康を維持するための原則と具体的方法について学ぶ。

- 医学生、看護学生としての意識・自覚ができる。

- 自主的な学習・問題解決意欲の向上を図る。

4 教養教育に関する取組

(1) 実施体制

中央教育審議会（2000.12取り纏め分）によると、「教養とはすべての人が生涯を通じて培っていくものである」とされ、更に初等・中等・高等教育の場での、「教養教育」のあるべき姿に関して言及している。教養とは、本来自発的に身につけるべきとしながらも社会全体の目的喪失感・閉塞感、受験勉強のみの短視的教育等の状況下で、新入生のうち、少なからざる割合で、本来「大学以前に身につけているべき考え方・振る舞い等が備わっていない」学生がいるのも、事実であろう。医師・看護婦（士）等を目指す学生を教育する上で、本学が医学部のみの単科大学であるため、「教養教育」の重要性は、より大きい。本学では、目標が明確である以上、全学的に教養の涵養にも、配慮しつつ教育・指導が行われている。詳細は、「3 教養教育の目的及び目標」で述べているが、医学科では、基礎医学以降、専門教育が主体となるため、中教審の指摘する「大学以前に身につけているべき考え方・振る舞い等が備わっていない」学生を含め、各教科が、相応の目標をおき、必要な教養を身につけさせるよう指導育成している。看護学科では、1・2学年度に基礎科目として、教養科目を配置する他、外国語科目を4年次の後学期にも開設している。

実施体制

医学部だけの大学であることから、「目的意識が、他の総合大学の環境」よりも、一層鮮明にされ得る。いわゆる「教養・基礎教育科目」の講義題目一覧にも現れている通り、将来求められる資質の基礎を成すような内容であることは勿論、実際の「講義方法・手段」として、全教員が一丸となり、あらゆる場を通じて、学生自身に考えさせ、自分自身を表現させ、相互交流を通して、学問に対する、また、人間に対する知的好奇心を発現させる努力を傾注している。

「2 教養教育に関する考え方」で述べたとおり、第1修学期間中、医学科では、新入生に約1ヶ月の「イントロダクトリーコース」が通常の授業開始に先だって設定されている。そのコースの中では基礎・臨床の教員の話があり、6年間の概要が展望でき、大学生としての心構えが早々に構築できるものとして効果を上げている。これ以外のイントロダクトリーコース

でも、移行期に学生が戸惑わずに、必要な内容を、一番効果的な時期に学習できるようにとの方針で貫かれている。イントロダクトリーコースでは、医学科・看護学科新入生が、入学直後、早速合宿研修に参加する。「学内とは異なる場」で、個性の発揮・協調

性・社会性の発達具合が観察でき、大きな意味で「教養教育に寄与」している。

カリキュラム等に具現されている詳細の内容に関しては同じく「2 教養教育に関する考え方」を参照。授業を通じての指導は勿論、第1修学期間では、教養・基礎教育担当教員が、第2修学期間は、基礎・臨床部門教員が「指導教員」を引き受け、実り多い学生生活になるように、陰に陽に注意を注いでいる。指導教員は、副学長を含め、「オフィスアワー」（学生が予約なしに相談できる時間帯）を設定し、学生・教員間交流を促進している。附属図書館は、24時間利用可能である。教科推薦図書も毎年指定され、人類の偉大な遺産である古典、最新の情報等が、配架されている。

学内の行事として、医大祭（大学祭）、球技大会、演奏会（管弦学部、合唱部等）、七夕及び年末時の附属病院内コンサート等がある。これらの行事は、全学的に応援され、広く、学内外にもアピールされる。地元・社会との交流を通して、学生達は刺激を受けあい、また、その準備活動等を通じ「医療職につく意味・期待される像」を再考する機会も多い。これら学生団体（文化・体育系）にも顧問（教員）が配置され、学生の相談相手としても、また試合・文化行事等の際は、共に喜び、苦勞し、学生が人間としても育ってくれるよう、縁の下での力持ち的役割として参加している。換言すると、「教養」が直接的知識の教授のみに留まらず、学生生活の全般において学ばれるべきものであるという広い意味に立脚し、本学では、正課中、課外活動を問わず、その支援態勢が拡充されている。この、疎漏の無い指導・支援態勢は、「こじんまりとした医学部だけの大学教育」のメリットである。今年からは、更に、県内大学と提携し、「単位相互制度」もスタートし、知的刺激は質・量とも拡大され、学生の個別の要求に益々応えられるようになったことも挙げられる。また、大学の直接の「実施体制」には、含まれ無いものの、サークル活動等の場においては、先輩達（卒業生）及びOBの教員が、折りに触れ学生団体行事等に参加し、後輩と交流をしている。これも、「教養を高めること」に役立つ有形・無形の応援といえよう。

さらに12年度からの新カリキュラムの実施と同時に、「学生による授業評価」を導入し、より良い授業を目指して全学的努力が始まっている。この制度はすでに各大学で導入されているが、大学によっては「学生による授業評価制度の導入」だけが強調され、本制度の授業改善への活用が不十分であるとも言われている。

(2) 教育課程の編成及び履修状況

医学科と看護学科では教養課程の編成が異なるので、それぞれに分けて記述する。

医学科：

基本方針：教養課程では新入生の多くが即、医学専門科目の講義を受けたがる傾向がある。しかし、大多数の学生は専門科目を受けられるだけの素地を有していない。これは高校卒業までの教育にも関係するが、本来の学問への理解度の低さにある。そこで一般教養及び教養課程を新入生が「大学での学問」とは何かを充分理解させ、専門科目の勉強がスムーズに行いうるよう教育する期間とみなしている。

本学では一般教養科目を人間コミュニケーション科学、医学基礎を主とした教養科目を自然科学とに分類して、表1に示すような科目を準備し、これらの科目を2年前学期までに（3学期間で）履修する。

表1 医学科一般教養・教養科目（教養・基礎科目）

区分	授業科目	必修 選択 別	単位数		要修得 科目 単位数
			1年 次	2年 次	
イン トリ ダク ト	一般教育論	必	1		必修 3科目 3単位
	医学概論	必	1		
	早期体験実習	必	1		
人 間 コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン 科 学	人間と倫理	必	1		必修 5科目 17単位 のほか 10単位
	人間行動の心理学	必	1		
	現代社会と人間	必	2		
	心の発達学	選	2		
	健康心理学	選		2	
	社会福祉学	選	1		
	法学	選	1		
	文学	選	1		
	歴史学	選	1		
	社会経済学	選	1		
	日本語表現学	選	2		
	社会学	選	2		
	知の構造と社会	選	2		
	環境人間学	選	2		
	英語 ~	必	6	2	

	ドイツ語 ~	必	4	1	
自 然 科 学	健康運動科学	必		1	必修 12科目 30単位 のほか 6単位
	健康運動科学演習 ~	必	2	1	
	数学 ・	必	3		
	数学	選		2	
	物理学 ・	必	3		
	物理学	選		2	
	物理実験学	必		1	
	化学 ~	必	6		
	化学	選		2	
	化学実験	必	1		
	生物学 ~	必	6		
	生物学実験	必		1	
	人間生物学	必	2		
	人間生物学	選		2	
	医学情報システム学	必	1		
	医学情報学	必	1		
	医学情報学	選		2	
合 計					66

平成12年度から1年次前学期の最初にイントロダクトリーコース（3週間）を設け、医学生としてのモチベーションを高めるための授業を導入した。ここでは一般教養及び教養科目教員による各科目毎のガイダンス、基礎医学科目教員及び臨床医学科目教員による医学のイントロダクトリー講義を各2コマずつ、学外からの有識者及び当大学の名誉教授らによる医学概論（前学期を通して開講し15コマ）、早期体験実習として学内診療科及び学外施設（2泊3日）での介護体験実習を数班に分けて行い、さらに看護学科と合同で1泊2日の合宿研修を行う。これらの講義・実習では先述のように大学での学問を行うために一般教養及び教養科目の意義を強調する。そして、このコースの最終日にこのコースの反省会（3コマ分の時間）を新入生及び担当教員全員の出席で行い、以後の改善の資料とする。なお、このコースの間、看護学科との合同講義は単位の関係で平行して開講されている。4週目から前学期の講義が開始される。

人間コミュニケーション科学科目における選択科目ではできるだけ多くの科目を受講することを勧めており、特に日本語の力が低下しているため日本語表現学は極力多くの学生が受講するように指導している。

自然科学科目は2年前期で選択科目があるが、ここでもできるだけ多く履修するように指導をしている。

看護学科：

基本方針：基礎科目、専門基礎科目、専門科目に3別

されるが、それらが1年次からくさび形ですべて平行して開講される。そのうち一般教養及び教養科目に相当するのが基礎科目で語学の選択科目を除き、2年次後学期までに終了する。基礎科目は人間の尊重と総合的理解、社会的責任の自覚などを通じて人間的成長を促し、看護学を学ぶうえで本質的土台となることを目的としている。開設時期と科目を表2に示す。

表2 看護学科教養科目（基礎科目）

区分	授業科目	必修 選択 別	単位数				要修得 科目 単位数
			1 年次	1 年次	3 年次	4 年次	
人文・社会科学	倫理学	必		2			必修 2科目 4単位
	心理学	必	2				
	教育学	選		2			
	社会学	選	2				
	哲学	選	2				
	歴史	選	1				
	文学	選	1				
	法学	選	1				
	経済学	選	2				
	女性学	選		2			
	日本語表現学	選	2				
自然科学	医療人類学	選		2			必修 3科目 6単位 のほか 選択必修 (印) から 1科目 2単位
	化学	必	2				
	情報科学	必	2				
	統計学	選		2			
	数学	選	2				
	物理学	選	2				
	人間生物学	必	2				
外国語	生命科学	選	2				必修 1科目 4単位 のほか 選択必修 (印) から 1科目 2単位
	英語 ～ ドイツ語	必 選	2 2				

	中国語・	選	2				
	スペイン語・	選	2				
	朝鮮語・	選	2				
	英語・	選				2	
	ドイツ語・	選				2	
	中国語・	選				2	
	スペイン語・	選				2	
	朝鮮語・	選				2	
保健体育	健康運動科学	必	2				必修 2単位
合 計							26

特に第二外国語はドイツ語、スペイン語、朝鮮語、中国語が開設されており、これらは一人の学生が1科目だけ受講することが多い。

これらの授業科目区分及び卒業要件単位数は表3に示す。

表3 授業科目区分名及び卒業要件単位数

授業科目区分名	学部名	単位数
イントロダクトリー コース 人間コミュニケーション科学 自然科学	医学部	
	医学科	3
	医学科	27
	医学科	36
人文・社会科学 自然科学 外国語 保健体育	医学部	
	看護学科	4
	看護学科	8
	看護学科	6
	看護学科	2

(3) 教育方法

授業は1コマを90分とし、朝9時から1時限が始まる。医学科においては1日4コマ（看護学科では1日5コマ）の授業時間枠がある。時限間は20分、昼食時は70分の休憩時間を設定している。

医学科においては入学後の1年半を第1修学期間とし、その間「一般教養及び教養科目」を履修する。その内訳は、1年次前学期の最初の3週間に「イントロダクトリーコース」があり、その後通常の授業が始まる。その内容は一般教養科目の「人間コミュニケーション科学」、及び「自然科学」から成っている。（第1修学期への進級に必要な履修単位数は66単位）

新入生は入学直後のオリエンテーションの後、3週間の「イントロダクトリーコース」の中で、入学の意義、及び医学生としてあるべき学生像を再認識し、医学を学ぶモチベーションの高揚を目的として実施される「新入生合宿研修」及び「早期体験実習」に参加する。さらに「一般教育概論」では、各教科の教育内容及び教育方針の紹介を通して、勉学の目的を明確にし、自発的学習及び自己解決型学習の必要性を認識させている。また今日では学習のみならず情報収集に必須となっているインターネット及び学内LANの使用法習得のため特別講習もこのコースに導入している。

一方、看護学科では4年間の一貫教育を目指して、1学年から専門教育科目と一般教養及び教養教育科目（名称は「基礎科目」）が平行して開講されている。「基礎科目」は「人文・社会科学」、「自然科学」、「外国語」及び「保健体育」に区分され、それぞれに看護学を修得するに必要と思われる授業科目が設定されている。（3年生への進級に必要な取得単位数は26単位）

本学では医学科・看護学科ともに「教育要項（シラバス）」なる冊子を毎年発行し、その中で本学の教育理念・教育目的・教育目標を明記し、さらに教科毎に教育のねらい・目標、教育内容・方法、評価方法、テキスト・参考書・文献等を紹介している。この冊子の学生及び教員への配布を通して、学生においては履修科目の学習目的を明確にさせるとともに、自主学習促進を図っている。一方、教員においては本冊子による他科目の教育内容の確認を通して担当科目の教育内容の変更あるいは科目間の内容調整の資料として利用されている。

教員がそれぞれに教育効果を上げるべく独自の工夫と努力を行っている。具体的には、本学の実状を反映した自作のテキスト、スライド、印刷物の作成、教材源としてのインターネットの積極的活用、自主学習をサポートするための画像データを含めた講義資料のLAN経由での公開、学生の学習相談に対応するためのオフィスアワーの設定、留年学生及び単位未修得学生

に対する個別指導等を行っている。入試においては理科3科目から2科目を選択させていることから物理、化学、生物のいずれかが未履修の学生が入学している。一方、専門課程でのチュートリアル教育の導入によって学生には問題解決型学習能力・コミュニケーション能力・グループ学習能力が必要とされている。このように学生の質及び学生に要求される能力の多様性に教育的見地から対応するため平成12年度開始の新カリキュラムから自然科学系理科3科目の実習時間の充実とともに、その中へのグループ学習・成果発表・討論時間等の導入を行った。

医学教育に必要な専門基礎知識の教育だけでなく医師としての素養育成、全人的教育、コミュニケーション能力の重要性を考慮し、「社会福祉」、「環境と人間」「コミュニケーション」に関する講義も導入している。さらに、チーム医療を念頭に医師と看護婦(士)とのグループワーク教育の重要性を考え、医学科と看護学科の学生が一緒に受講できる合同授業も導入している。

教育評価は基本的に授業出席数及び期末試験の成績によってなされている。但し、科目によっては更に授業での受講態度、随時試験、レポート等も判定に使用されている。進級判定は医学科では一年生から、2年生への進級時（必修科目9科目以上の単位未修得は留年、8科目以下の単位未修得者は第1修学期修了までに科目担当教員による個別指導及び回復試験等によって単位認定判定が行われる）と2年後期の第1修学期終了時（進級基準の66単位未修得者は留年）に、看護学科では2年生から3年生の進学時（進級基準の26単位未修得者は留年）に行っている。

さらに、これまで各教員が個別に実施していたことであるが、「学生による授業評価」を平成12年度後学期から全学的に実施し、その結果を教員にフィードバックし、学生と教員の連携と信頼関係に基づいて授業をより良いものにしていく改善のための努力が始まっている。

5 変遷及び今後の方向

平成3年の大学設置基準の大綱化を踏まえて各大学において、入学制度の多様化、一貫教育を目的とする改革が進められて来た。全国の単科医科大学においては、多様な入学試験を実施し、また、一貫教育はカリキュラムの問題として一般教育の組織を維持しつつ、積極的に改革を進めて来ている。本学では設置基準の大綱化に先立って一貫教育の必要性を認識し、大学創設以来、一般教育科目の一部（医学英語及び総合人間学）を専門課程に導入し、医学への目的意識を高めるために1年次に「医学概論」、さらに、夏期休暇時に「医学早期体験実習」を導入してきた。一方、平成9年度からの多様な入学試験の導入（例えば基礎学力だけでなく、医師としての適性を備えた学生の入学を期待して導入された前期・後期の一般選抜への総合問題形式の入学試験の導入）によって、医師を目指すことへの動機・適性に欠ける学生や、医学教育に基本的に必要とされる科目の基礎学力の欠けた学生が顕著となって来た。平成12年度入学生から始まった医学科専門課程の単位制導入に伴うカリキュラムの大改革に対応して、一般教育課程のカリキュラムの大幅な改革を行った。その主な特徴を上げると、これまでの「一般教育科目」を「教養・基礎教育科目」と名称を改め、その内容は「イントロダクトリーコース」、「人間コミュニケーション科学」及び「自然科学」から成っている。特に入学直後導入された3週間の「イントロダクトリーコース」では学生の医学へのモチベーションを高めるため、これまで夏期休暇に実施され、履修単位は認められてなかった「早期体験実習」をここに移し、履修単位を認定することとした。また、医学を目指す学生の全人教育を重視し、選択科目として「社会福祉学」、「環境人間学」及び「日本語表現学」を増設した。さらに、物理学、化学、生物学の自然科学3科目の講義の一部を「イントロダクトリーコース」に移して、講義時間を減らす一方で、「実習」の時間を増やし、内容の充実を図った。第1修学期の最初に導入された「イントロダクトリーコース」には「一般教養・教養教育」と「専門基礎教育」との有機的関連性を高めるため、上述のように「生命科学入門」あるいは「医化学」の中に物理学、化学、生物学の教員が担当する授業がこのコースに設定された。さらに、医学臨床教育の最初に導入された「イントロダクトリーコース」では「医療倫理・心理学」及び「医学英語」が設定され、倫理学、心理学及び英語科目の教員が担当することになっている。この新しいカリキュラムはまだ始まったばかりで、その成果について現段階では言及できないが、「学生による授業評価の導入」を

含めて、全学的により良い医学教育を目指して改革に取り組んでいる。以上が今日にいたる本学の「教養教育」の変遷である。

今後の教養教育の方向に関して、短期的には平成12年度に導入したカリキュラム改革に関連して、新たな問題が生じた場合の対処がある。本学では「一般教育部門」「医学専門基礎教育部門」「医学臨床教育部門」からなるカリキュラム委員会が設置されており、問題が生じた場合には各部門が相互に緊密な情報交換を行いながらより良い医学教育を目指して不断の改革をすすめていく体制を整えている。

中長期的課題としては、入学制度と大学における教育方法との関連の問題がある。現在実施されている多様な入学試験の導入のために、結果として医学志望の動機が希薄で、かつ基礎学力の低い学生が散見されるところである。大学における教育、特に医学教育では、人間性と基礎学力においてある基準を満たした学生を教育対象とすることにより大きな効果があがると考える。したがって、入学試験制度においてもその多様性だけを強調するのではなく、医学を学ぶ上で必要な人間性と基礎的学力を備えた学生だけを選別できる厳格な選抜試験の実施が望まれるところである。一方、学習指導要領の改革等により学生の基礎学力の更なる低下が危惧され、入学後の学生の基礎学力を医学専門教育に支障のないレベルまで引き上げることが今後の「教養教育」に強く求められると予想される。幸いに単科医科大学には一般教育が組織として残されており、本学においても一般教育の果たす役割は増大すると考えられ、その責任も極めて大きいと考える。学生と教員との連携と信頼関係を基に、「入試制度と入学後の学習との相関」に関する調査結果、あるいは「学生による授業評価」の情報を参考にしながら、より良い教養教育を目指しての努力が続くと考えらる。

<2> 分母を成績判定を行った学生数とした場合>

授業科目区分名	最小値 (%)	平均値 (%)	最大値 (%)
インストラクティブ・コースト	100	100	100
人間コミュニケーション科学	85.0	94.2	100
自然科学	86.9	96.0	100

(3) 平成12年度

平均値 (単位)	最大値 (単位)
7.3	7.7

看護学科

(1) 平成12年度

授業科目区分名	最小値 (人)	平均値 (人)	最大値 (人)
人文・社会科学	3	35.1	58
自然科学	6	48.7	60
外国語	2	26.9	58
保健体育	60	60	60

(2) 平成12年度

<1> 分母を履修登録した学生数とした場合>

授業科目区分名	最小値 (%)	平均値 (%)	最大値 (%)
人文・社会科学	42.8	92.1	100
自然科学	76.5	92.5	100
外国語	92.5	95.5	100
保健体育	100	100	100

<2> 分母を成績判定を行った学生数とした場合>

授業科目区分名	最小値 (%)	平均値 (%)	最大値 (%)
人文・社会科学	94.7	97.6	100
自然科学	96.5	98.6	100
外国語	92.5	94.8	100
保健体育	100	100	100

(3) 平成12年度

平均値 (単位)	最大値 (単位)
3.2	3.6

(3) 平成12年度(全学)

平均値 (単位)	最大値 (単位)
56.3	7.7

4-3-2 一般教養に関する教育の授業科目における履修登録者数の上限設定

人数区分	授業科目区分名	授業科目名
1. 20名以下		
2. 21名以上 ～50名以下	人間コミュニケーション科学	英語 ドイツ語
	自然科学	健康運動科学演習 物理学実験 化学実験 生物学実験
3. 51名以上 ～100名以下		
4. 100名超		

4-3-3 一般教養に関する教育の授業科目におけるシラバスの実施状況

(1)

・「2」を選択した場合

授業科目区分名

・「3」を選択した場合

学部名	授業科目区分名

・「4」を選択した場合、以下の欄に具体的に記述してください。

(2)

・「7」を選択した場合、以下の欄に具体的に記述してください。

(3)

(4)

・「4」を選択した場合、以下の欄に具体的に記述してください。